

ツエねずみ

宮沢賢治

青空文庫

ある古い家の、まっくらな天井裏に、「ツエ」という名まえのねずみがすんでいました。

ある日ツエねずみは、きよろきよろ四方を見まわしながら、床ゆかしたかいどう下街道を歩いていますと、向こうからいたちが、何かいいものをたくさんもって、風のように走って参りました。そしてツエねずみを見て、ちよつとたちどまって早口に言いました。

「おい、ツエねずみ。お前んとこの戸棚とだなの穴から、金米糖こんべいとうがばらばらこぼれているぜ。早く行ってひろいな。」

ツエねずみは、もうひげもびくびくするくらいよろこんで、いたちにはお礼も言わずに、いっさんにそっちへ走って行きました。

ところが戸棚の下まで来たとき、いきなり足がチクリとしました。そして、「止まれ、だれかつ。」と言う小さな鋭い声がします。

ツエねずみはびっくりしてよく見ますと、それは蟻ありでした。蟻の兵隊は、もう金米糖のまわりに四重の非常線を張って、みんな黒いまさかりをふりかざしています。二三十匹は金米糖を片つぱしから砕いたり、とかしたりして、巢へはこぶしたくです。ツエねずみはぶるぶるふるえてしまいました。

「ここから内へはいつてならん。早く帰れ。帰れ、帰れ。」蟻のとくむそうちょう特務曹長が、低い太い声で言いました。

ねずみはくるつと一つまわって、いちもくさんに天井裏へかけあがりました。そして巢の中へはいつて、しばらくねころんでい

ましたが、どうもおもしろくなくて、おもしろくなくて、たまりません。蟻ありはまあ兵隊だし、強いからしかたもないが、あのおとなしいいたちめに教えられて、戸棚とだなの下まで走って行って蟻ありの曹そうちよう

長ながにけんつくを食うとは、なんたるしやくにさわることだとツエねずみは考えました。そこでねずみは巢からまたちよろちよろはい出して、木小屋の奥のいたちの家にやって参りました。

いたちはちようど、とうもろこしのつぶを、齒でこつこつかんで粉にしていますが、ツエねずみを見て言いました。

「どうだ。金米糖がなかったかい。」

「いたちさん。ずいぶんお前もひどい人だね。私わたしのような弱いものをだますなんて。」

「だましやせん。たしかにあつたのや。」

「あるにはあつても、もう蟻が来てましたよ。」

「蟻が、へい。そうかい。早いやつらだね。」

「みんな蟻がとつてしまいましたよ。私のような弱いものをだますなんて、償うて^{まじ}ください。償うてください。」

「それはしかたない。お前の行きようが少しおそかつたのや。」

「知らん、知らん。私のような弱いものをだまして。償うてください。償うてください。」

「困つたやつだな。ひとの親切をさかさまにうらむとは。よしよし。そんならおれの金米糖をやろう。」

「償うてください。償うてください。」

「えい、それ。持って行け。てめえの持てるだけ持つてうせちまえ。てめえみたいな、ぐにやぐにやした男らしくもねえやつは、つらも見たくねえ。早く持てるだけ持つてどつかへうせろ。」
「私たちはプリプリして、金米糖を投げ出しました。ツエねずみはそれを持てるだけたくさんひろつて、おじぎをしました。私たちはいよいよおこつて叫びました。」

「えい、早く行つてしまえ。てめえの取つた、のこりなんかうじむしにでもくれてやらあ。」

ツエねずみは、いちもくさんに走つて、天井裏の巢へもどつて、金米糖をコチコチ食べました。

こんなぐあいですから、ツエねずみはだんだんきらわれて、た

れもあんまり相手にしなくなりました。そこでツエねずみはしかたなしに、こんどは、柱だの、こわれたちりとりだの、バケツだの、ほうきだのと交際をはじめました。中でも柱とは、いちばん仲よくしていました。

柱がある日、ツエねずみに言いました。

「ツエねずみさん、もうじき冬になるね。ぼくらはまたかわいてミリミリ言わなくちやならない。お前さんも今のうちに、いい夜具のしたくをしておいた方がいいだろう。幸いぼくのすぐ頭の上に、すずめが春持って来た鳥の毛やいろいろ暖かいものがたくさんあるから、いまのうちに、すこしおろして運んでおいたらどうだい。僕ぼくの頭は、まあ少し寒くなるけれど、僕は僕でまたくふう

をするから。」

ツエねずみはもつともと思いましたので、さっそく、その日から運び方にかかりました。

ところが、途中で急な坂が一つありましたので、ねずみは三度目に、そこからストーンところげ落ちました。

柱もびっくりして、

「ねずみさん、けがはないかい。けがはないかい。」と一生懸命、からだを曲げながら言いました。ねずみはやつと起き上がって、それからかおをひどくしかめながら言いました。

「柱さん。お前もずいぶんひどい人だ。僕のような弱いものをこんな目にあわすなんて。」

柱はいかにも申しわけがないと思つたので、

「ねずみさん、すまなかつた。ゆるしてください。」と一生けん命わびました。

ツエねずみは凶にのつて、

「許してくれもないじゃないか。お前さえあんなこしやくなさし
ずをしなければ、私はこんな痛い目にもあわなかつたんだよ。償^{まど}
つておくれ。償つておくれ。さあ、償つておくれよ。」

「そんなことを言つたつて困るじやありませんか。許してください
いよ。」

「いいや、弱いものをいじめるのは私はきらいなんだから、償つ
ておくれ。償つておくれ。さあ、償つておくれ。」

柱は困ってしまつて、おいおい泣きました。そこでねずみも、しかたなく、巢へかえりました。それから、柱はもうこわがつて、ねずみに口をききませんでした。

さてそののちのことですが、ちりとりはある日、ツエねずみに半分になつた最中もなかを一つやりました。するとちようどその次の日、ツエねずみはおなかが痛くなりました。さあ、いつものとおりツエねずみは、まどつておくれを百ばかりも、ちりとりに言いました。ちりとりもあきれて、もうねずみとの交際はやめました。

また、そののちのことですが、ある日バケツはツエねずみに、せんたくソーダのかけらをすこしやつて、

「これで毎朝お顔をお洗いなさい。」と言いましたら、ねずみは

よろこんで次の日から、毎日それで顔を洗っていましたが、そのうちにねずみのおひげが十本ばかり抜けました。さあツエねずみは、さつそくバケツへやって来て、償^{まど}っておくれ償^{まど}っておくれを、二百五十ばかり言いました。しかしあいにくバケツにはおひげもありませんでしたし、償うわけにも行かず、すっかり参ってしまった、泣いてあやまりました。そして、もうそれからは、ちよつとも口をききませんでした。

道具仲間は、みんな順ぐりにこんなめにあつて、こりてしまいましたので、ついにはだれもツエねずみの顔を見るといそいでわきの方を向いてしまうのでした。

ところがその道具仲間に、ただ一人だけ、まだツエねずみとつ

きあつてみないものがありました。

それは針がねを編んでこさえたねずみ捕りとでした。

ねずみ捕りは全体、人間の味方なはずですが、ちかごろは、どうも毎日の新聞にさえ、猫ねこといっしよにお払い物という札をつけた絵にまでして、広告されるのですし、そうでなくても、元來人間は、この針金のねずみ捕りを、一ぺんも優待したことはありません。せんでした。ええ、それはもうたしかにありませんとも。それに、さもさわるのさえきたないようにみんなから思われています。それですから実は、ねずみ捕りは人間よりはねずみの方に、よけい同情があるのです。けれども、たいていのねずみはなかなかかわがつて、そばへやって参りません。ねずみ捕りは、毎日やさしい

声で、

「ねずちゃん、おいで。今夜のごちそうはあじのおつむだよ。お前さんの食べる間、わたしはしっかりと押えておいてあげるからね、安心しておいで。入り口をパターンとしめるようなそんなことをするもんかね。わたしも人間にはもうこりこりしてるんだから。おいでよ。そら。」

なんてねずみを呼びかけますが、ねずみはみんな、

「へん、うまく言ったらあ。」とか、

「へい、へい。よくわかりましてございます。いずれ、おやじや、せがれとも相談の上で。」とか言ってそろそろ逃げて行ってしまいます。

そして朝になると、顔のまつ赤なか下男げなんが来て見て、

「またはいらない。ねずみももう知ってるんだな。ねずみの学校で教えるんだな。しかしまあもう一日だけかけてみよう。」と言いながら、新しいえさととりかえるのでした。

今夜も、ねずみ捕りは叫びました。

「おいでおいで。今夜はやわらかな半ぺんだよ。えさだけあげるよ。大丈夫さ。早くおいで。」

ツエねずみが、ちょうど通りかかりました。そして、

「おや、ねずみ捕りさん、ほんとうにえさだけをくださるんですか。」と言いました。

「おや、お前は珍しいねずみだね。そうだよ。えさだけあげるん

だよ。そら、早くお食べ。」

ツエねずみはプイツと中にはいって、むちやむちやむちやつと半ぺんを食べて、またプイツと外へ出て言いました。

「おいしかったよ。ありがとう。」

「そうかい。よかったね。またあすの晩おいで。」

次の朝、下男が来て見ておこつて言いました。

「えい。えさだけとつて行きやがった。ずるいねずみだな。しかしとにかく中にはいったというのは感心だ。そら、きようはい鯛わだぞ。」

そして鯛を半分つけて行きました。

ねずみ捕りは、鯛をひっかけて、せつかくツエねずみの来るの

を待っていました。

夜になって、ツエねずみはすぐ出て来ました。そしていかにも恩に着せたように、

「今晚は、お約束どおり来てあげましたよ。」と言いました。ねずみ捕りは少しむっとしたが、無理にこらえて、

「さあ、食べなさい。」とだけ言いました。

ツエねずみはピイツとはいって、ピチャピチャピチャツと食べて、またピイツと出て来て、それから大風おおふうに言いました。

「じゃ、あした、また、来て食べてあげるからね。」

「ブウ。」とねずみ捕りは答えました。

次の朝、下男が来て見て、ますますおこつて言いました。

「えい。ずるいねずみだ。しかし、毎晩、そんなにうまくえさだけ取られるはずがない。どうも、このねずみ捕りめは、ねずみからわいろをもらつたらしいぞ。」

「もらわん。もらわん。あんまり人を見そこなうな。」とねずみ捕りはどなりましたが、もちろん、下男の耳には聞こえません。きようも腐つた半ぺんをくつつけていきました。

ねずみ捕りは、とんだ疑いを受けたので、一日ぶんぶんおこつていました。夜になりました。ツエねずみが出て来て、さも大儀たいぎらしく言いました。

「あああ、毎日ここまでやって来るのも、並みたいのこつちやない。それにごちそうといつたら、せいぜい魚さかなの頭だ。いやに

なっちまう。しかしまあ、せつかく来たんだからしかたない。食ってやるとしようか。ねずみ捕りさん。今晚は。」

ねずみ捕りは、はりがねをぷりぷりさせておこっていましたので、ただ一こと、

「お食べ。」と言いました。ツエねずみはすぐプイツと飛びこみましたが、半ぺんのくさっているのを見て、おこつて叫びました、。

「ねずみとりさん。あんまりひどいや。この半ぺんはくさつてます。僕のような弱いものをだますなんて、あんまりだ。まじ償ってください。償ってください。」

ねずみ捕りは、思わず、はり金をりゅうりゅうと鳴らすくらい、

おこつてしまいました。そのりゆうりゆうが悪かつたのです。

「ピシヤツ。シインン。」えさについていたかぎがはずれて、ねずみ捕りの入り口が閉じてしまいました。さあもうたいへんです。

ツエねずみはきちがいのようになって、

「ねずみ捕りさん。ひどいや。ひどいや。うう、くやしい。ねずみ捕りさん。あんまりだ。」と言いながら、はりがねをかじるやら、くるくるまわるやら、地だんだふむやら、わめくやら、泣くやら、それはそれは大きすぎです。それでも、償ってください、償ってください、もう言う力がありませんでした。

ねずみ捕りの方も、痛いやら、しゃくにさわるやら、ガタガタ、ブルブル、リュウリュウとふるえました。一晚そうやってとうと

う朝になりました。

顔のまっ赤かな下男が来て見て、こおどりして言いました。

「しめた。しめた。とうとう、かかった。意地の悪そうなねずみ
だな。さあ、出て来い。こぞう。」

青空文庫情報

底本：「童話集 銀河鉄道の夜 他十四編」岩波文庫、岩波書店

1951（昭和26）年10月25日第1刷発行

1966（昭和41）年7月16日第18刷改版発行

2000（平成12）年5月25日改版第71刷発行

入力：のび

校正：noriko saito

2005年5月12日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www>

W.aozora.gr.jp) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランテイアの皆さんです。

ツエねずみ

宮沢賢治

2020年 7月12日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>